

## 江戸漢詩と擬古表現

揖斐 高

江戸時代における擬古主義の表現論は荻生徂徠によって提唱された。徂徠は従来の朱子学や古義学を批判する新たな古文辞学という儒学を提唱し、儒学の主要課題を道徳という人間の心のあり方の問題から、人間の心の外側にある礼楽という政治制度や社会制度のあり方の問題へと転換させたが、その根底には六経と総称される古代中国に成立した儒学テキストの表現は、どのように書かれているのかという、表現論的な関心が横たわっていた。

徂徠は前漢以前の古代中国の書物を繰り返し読むことによって、言語表現には意味を伝える「言」と、どのように表現するかという「辞」という二つの要素(側面)があり、それらはともに時代によって変化することに気付いた。そして、六経に記された「先王の道」を明らかにするためには、古代中国語の意味＝古義を知ることがもちろん、さらに大切なことは古代中国語の修辞＝古文辞を体得することにあるとし、それなくして「先王の道」を明らかにするという儒者の務めは果たせないとした。

そのような古文辞を、時代も違い、言語も違う江戸時代の日本人が理解するにはどうすれば良いか。理詰めの言葉ならば翻訳によって理解することも可能だが、レトリカルな表現である古文辞とい

うものは翻訳不可能であると徂徠はいい、そうした古文辞を江戸時代の日本人が理解するためには、古文辞を自分のものとして使いこなせるようにならなければならぬ。つまり、古文辞を摸擬して自らの表現法として身につけるよりほかないと徂徠は主張した。

こうした古文辞学の基礎として主張された表現論は、徂徠およびその一門の漢詩文の創作方法としても用いられた。徂徠およびその一門の詩人たちは、明の古文辞派の詩人たちの唱えた「文は秦漢、詩は漢魏・盛唐」というスローガンにしたがって、その時代の作品の表現と格調を模倣して自分たちの漢詩文作品を作ろうと試みた。とくに詩において手本とされたのは、明の古文辞派の代表的な詩人である李攀龍が編集したとされていた、盛唐詩中心の唐詩のアンソロジー『唐詩選』であった。

ここで問題になるのは、こうした古代中国や唐の時代の作品すなわち古文辞を模倣した詩が、江戸時代の日本のいわば現代詩になり得るのかということである。古文辞を模倣して作られた擬古的な詩が、古代中国とは時代も地域も異なる当代日本の現代詩であり得ると徂徠が考えたのは、詩の源となる人情というものが、時代や地域の違いを超えた普遍的なものだと考えたからである。徂徠は「訳

ぶんせんてい  
文筌蹄題言十則』（『徂徠集』卷十九）において「中華と此の方と情態（人情世態）全く同じ」と記し、国や時代は違っても人情は同一であるという異域・古今同情の認識を示した。この認識を基にして、江戸の人間であっても古文辞を模倣することによって古代中国人に同化することが可能であり、同時に、古文辞を模倣して作られた詩も江戸の現代詩として通用すると徂徠は考えたのである。

このような詩論をもとに、徂徠一門すなわち藪園の詩人たちは十八世紀の江戸の町を詩に詠んだ。例えば徂徠の「新歳偶作」（『徂徠集』卷五）や服部南郭の名高い「夜下墨水」（『南郭先生文集』初編卷五）などを見ると、擬古の方法によって詠まれたそれらの詩が表現しているのは中国的な雄大な情景であって、現実の江戸の風景とは乖離している。そうした乖離の原因は、古代中国と十八世紀江戸の「人情世態」は「全く同じ」とする、異域・古今同情の認識の原理的な適用にあった。したがって、現実の江戸を詩の世界に表現しようとするならば、原理的な擬古の方法には修正が必要であった。そのために徂徠や南郭が持ち出したのが、『易』繫辞伝の「之を擬<sup>なぞ</sup>へて後に言ひ、之を議<sup>はか</sup>りて後に動き、擬議して以てその変化を成す」を典拠とする「擬議変化」ということであった。

しかし、この「擬議変化」は擬古主義の詩論の問題として、徂徠においても南郭においても問題提起以上に深められることはなかった。ただ、詩人としての才能に恵まれ、儒者としてよりも詩人として活動した服部南郭は、詩の材料となる「人情世態」の差異に徂徠よりも敏感であり、

徂徠が作詩過程を〈調→修辞→詩意〉という流れで捉えたのに対し、徂徠とは逆に〈詩題→詩意→興趣→修辞〉という流れで捉えようとした。そしてその結果、「以<sup>おも</sup>へらく擬<sup>ぎ</sup>倣<sup>ごう</sup>の作は、実にその人を奪ひて僅かに為すべきなり。然らずんば、少しく避けんのみ。即ち拙なるも亦た僕の拙なり。豈に虎を画きて成らざるに愈<sup>まさ</sup>らざらんや」（『南郭先生文集』初編卷十「島婦徳に与ふ」）と主張するに至った。

つまり、擬古の詩であっても、作者その人を完全に自分のものにすることができないのならば、たとえ下手であっても、下手な自分の詩を作る方がまだましだということである。この南郭の主張は、徂徠一門の擬古主義を批判し、性靈説の詩論を提唱した山本北山の詩論書『作詩志穀』のなかの、「人ノ詩ヲ剽襲シテ、巧ナランヨリハ、吾詩ヲ吐<sup>ハキ</sup>出シテ、拙キガ優レルト心得ベシ」という言説と、ほとんど同一のものになっている。

結局、文学の方法としての擬古主義において、「擬議変化」はどうあるべきかという問題を詰め切れなかった古文辞格調派の詩文は、やがて十八世紀の後半になると現実を反映しないものとして飽きられてゆき、新たに山本北山などによって提唱された性靈説の個性主義的・現実主義的な詩文に交替してゆくことになるのである。

（成蹊大学名誉教授）